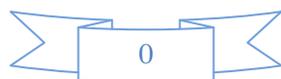


2010年度

「ほっとスペース八王子」

定期第22回総会

対 案



[1] 総括案

(ア)はじめに

昨年度は「ほっとスペース八王子」設立以来の大変な年でした。

「ほっとスペース八王子」は同じ心の病を持つ仲間たちが家族や職場、地域から差別と偏見の目にさらされながら息をひそめてひっそりと生きてきました。そういう仲間たちが差別の現実と向き合い、お互いに支え合って地域で一人でも生きていける場として開設されたはずでした。

ところが、昨年度の執行部は同じ心の病を持つ者同士がいがみ合い、気に入らない仲間は排除するというおぞましい空間にさせてしまいました。

仲間が自立し、自分の人生を自分で歩む力を身につけていくには何が必要かをしっかりと話し合う機会も与えない執行部は存在意義もありません。一人ひとりの会員の悩みや社会や「ほっとスペース八王子」内で起きている問題や疑問を話し合えないことは「ほっとスペース八王子」内に混乱を生み出すだけでした。

更に執行部は外部との交通も取らず、内へ内へともり、「ほっとスペース八王子」の会員さえ良ければ後は知らないと内向的な活動の展開だったために、財政的な支援も人的な支援も一気に失ってしまいました。仲間の拡大もほとんど元会員ばかりで新規の会員は執行部によっては昨年度中にはほとんど成果がありませんでした。

「八王子・赤堀さんと共に闘う会」時代からの理念を守って創設された「ほっとスペース八王子」と賛助会に対して執行部は理解をしようとしませんでした。

地域の「精神病患者」「精神障害者」が不当に逮捕され、冤罪や「精神病患者」であるがために不当に罰則が重くさせられる現実と向き合い、仲間を守り抜くための資金として賛助会の資金があります。

しかし、賛助会に対する執行部の考え方は差別に怒りを持たず、差別と闘わないために誤解を発生し、「ほっとスペース八王子」会員だけが好き勝手に使えるお金だと執行部は勘違いしていました。

また、執行部は一般会員に上から目線に対応することで一般会員から反発されたり、離反を受けたりしてきました。その結果が会員の減少です。あるいは見学者が入会に結びつかない現実でもありました。

職場、家族から排除され、どこの作業所も受け入れてくれない仲間。安堵を求めて通所していた会員にとって「ほっとスペース八王子」からも排除されることは死活問題です。執行部に迎合するしかない状況に追いやられ、指導部への怒りや差別への怒りを感じても抑え込まれ、そのために具合が悪くなるという現実を生み出してきました。

毎日のプログラムも実質的にはなにもなく、毎日フリータイムとなるありさまでした。プログラムの執行に対する責任体制もありませんでした。

月間予定表の予定が直ぐに変わり、「ほっと」出来るどころか息が詰まるような毎日に執行部を批判をすると怒鳴られ、毎日が言い争いの、怒鳴り合いの「ほっとスペース八王子」になり下がってしまいました。「ほっとスペース八王子」に居ることは毎日、人の顔色を見て過ごすようなストレスがたまる場に変貌してしまいました。

その結果が松野さんの逮捕事件、高橋由美子さんの自死未遂事件でした。

差別に対して怒りをぶっつけるような活動、「精神病患者」解放運動における姿勢が全くなかったのです。

その内向きの活動の問題性が財政面での結果として人件費の予算執行上の大幅な誤算として表れてしまったものと思います。一体全体何を根拠に斎藤職員の雇用延長を認め、夏季一時金を支払い、12月の冬季一時金にしても何の根拠で一月分も支払うことが出来たのでしょうか。執行部はこの責任をどう取るのでしょうか。総辞職して責任を取るべき事態です。

執行部はその責任を取るために一端は総辞職すべきだと思います。前年度執行部の人事と変わり映えしない今年度人事案は否決されるべきだと思います。人心を一新して再度「ほっと」できる「ほっとスペース八王子」に再建し、出直して、差別と対決する活動、「障害者自立支援法」撤廃が可能な執行体制を作るべきだと思います。大根田さんの長期強制入院、高橋由美子さんの現実には差別そのものの結果です。不当に逮捕されたり、長期強制入院させられて地域で苦しんでいる多くの仲間といっしょに、差別と対決する課題を進めていこうではありませんか。

(イ) 2009年の闘いを総括すれば、差別への怒りこそ、「ほっとスペース八王子」の原動力であり、差別との闘いこそ、「ほっとスペース八王子」の土台であるということが、つかみ取れると思います。

- ・ 執行部の批判を許さないという傲慢さと差別。
- ・ 一般会員と代表、運営委員の間に垣根を設け、会員の主体性を認めない強権的な運営。
- ・ 「ほっとスペース八王子」内部での差別の横行と民主主義の破壊は、差別への怒りという原動力と土台を根こそぎ解体してしまうものになっていました。その結果、「ほっとスペース八王子」のずさんな財政処理、会員減、いじめの横行、救援闘争の低迷など「ほっとスペース八王子」の土台と大黒柱が揺らいでいます。

(ウ) 「ほっとスペース八王子」内の差別について

今の「ほっとスペース八王子」が抱えている危機の最大の問題は、新たに会員になろうとして来訪する人、また会員になろうかと考える元会員、さらにはこれまで通所していた現会員にとってさえ、「ほっとスペース八王子」が魅力的なものでなくなってしまっている事。

行こうと思っても怖くて行けない場所になってしまっていることです。

誰もが傷つき、症状を悪くするような差別と抑圧、いじめが吹き荒れ、会員全体で運営するという当事者運営の民主主義の否定と会員の主体性・自主性の否定という破壊作用が、執行部によって横行させ、誰にも止められなくなっているからです。

病状は誰でもあります。人間関係をうまく結べないから練習のために通っているのです。社会経験が豊富で常識があり、協調性があれば「ほっとスペース八王子」に通う必要はありません。

それを「非常識な言動だから」「協調性がないから」「子供じみているから」「わがままだから」などとあげつらって仲間を排除するような差別構造、いじめ構造ができてしまっています。

「ほっとスペース八王子」は、今や、おぞましいばかりの差別・抑圧の組織になってしまっているのです。

一年前の、前代表の再発、今年の所長の病気休養を、「精神病患者」として一体どう考えるのか。政治的立場や、運動の上での立場は、それぞれ違っていても、「精神病患者」の活動の中から、「精神病患者」を再発させたり、病気休養に追い込む事態は、全く尋常でない、異常と言うしかない差別が存在することの動かぬ証拠です。一刻もはやく、「ほっとスペース八王子」の中から差別を一掃しなければならぬと思います。

執行部の総括・方針・予算の議案を見ると、これらに一片の反省もなく、輪をかけた専制支配を続けることによって、「ほっとスペース八王子」の生命力（「差別への怒り」という原動力と土台）を最終的に絞め殺すことになるものとなっています。まったく、怒りに耐えません。

よって、現執行部は、2009年の失敗の責任を潔く認め、反省し、総退陣・総辞職すべきです。いまや、ただそれだけが、瀕死の危機にある「ほっとスペース八王子」を救う道です。

【討議資料】

「ほっとスペース八王子」がどのようにして生まれてきたのか。 その背景、その原動力は何だったのでしょうか。

1970年代末、

「私ハ殺ッテイマセン。助けテクダサイ。真犯人ハ他ニイルハズデス」

「署名デス。集メテクダサイ。仲間ト仲良クシテクダサイ」

という無実の「精神障害者」・赤堀政夫さんの激しい怒りの訴えが、孤立させられ分かれ分かれにさせられていた「障害者」の魂を揺り動かし、「障害者」として差別されてきた悔しき、積年の恨みと怒りを解き放す、やむにやまれない差別との闘い、身体をはった差別実力糾弾の闘いに駆り立てていきました。

それまで社会から疎まれ、さげすまれ、差別にあえいで、息をひそめて地をほうようにひっそりと生きてきた「障害者」たちが怒りの炎を燃やし、それを結集し、この差別に満ちた社会に挑戦し、ぐらぐらと揺るがし、ついに差別と圧政の一角を打ち破って赤堀政夫さんの無実、赤堀政夫さんの奪還を勝ち取ったのです。

赤堀闘争の中で奪い返してきた、人間としての誇りと尊厳。

立ち上がった「障害者」のみんなの心を一つにした熱い思い。

闘いの中で生まれた深い共感と連帯感、・・・そのひとつひとつが、きらきらと輝く、かけがいのない宝物でした。この闘いの勝利を勝ち取ったときの感動は一生忘れることはできません。

赤堀闘争の後、立ち上がった「障害者」たちは、その支援者と共に、「障害者」解放の闘いを志して、各地に運動を作って、差別との闘いに持続的に取り組んでいきました。

「ほっとスペース八王子」は、このような時代背景の中で生まれ、「八王子・赤堀さんと共に闘う会」を受け継ぎ、発展させるものとして、新たな闘いに取り組んできたのでした。

「ほっとスペース八王子」を生みだした原動力、「ほっとスペース八王子」を動かしてきた原動力は、差別への怒りであり、他の作業所のような職員主体の運営原則とは全く違う「ほっとスペース八王子」の独特の自主運営・当事者運営の原則は、その原動力である差別への怒りの熱い思いを絶えることなく燃やし続けるためのものだったのです。

そのような自己解放・自主解放の理念に基づく、自主運営・当事者運営の原則で運営されてきたから、他の作業所で受け入れられなかった「障害者」が、その熱い思いに惹かれ、集まり、差別との闘いに情熱を燃やし、ときに「ほっと」することができ、それぞれの個性を発揮して、思い思いの活動を繰り広げてきたのです。

スポーツの世界では障害者国体で銀メダル、銅メダルを獲得しました。

演説大会でも優勝者が出ました。

差別への怒りに基づき、差別との闘いを通して、怒りを解き放していく闘い・・・これこそ、「ほっとスペース八王子」を平和を破壊し戦争に向かう社会の反動化と差別の吹き荒れから守り、「ほっとスペース八王子」内部に職員や一部会員（運営委員）の非民主的な運営を持ち込ませない力として作用してきたのです。

私たちはなぜ差別されるのか？

仲間が逮捕された時に差別の現実をはっきりと理解しました。通常人だと逮捕されないような事件とも言えない事件でも逮捕され、しかも22日間も勾留されました。

強制入院で抵抗すると、電パチを受ける事実。「反省しろ、反省しろ」と毎日毎晩お題目のように問い詰められる事実。四肢拘束・オムツ装着は今も続いています。

私たちの友は誰？

私たちの敵は誰？

そのような、私たちを悩ませる難問、自問自答は、徹底的な当事者運営、自主運営の「ほっとスペース八王子」で活動することで、探し求めることができます。これも、「ほっとスペース八王子」のかけがえのない魅力であったと思います。

[方針案]

[黒川裕之の言いたいこと]

*** 動物を調教するのは良いが会員に対して調教するな！！！！**

*** 会員はケダモノではない！！！！
怒鳴りたいするな！
主体性を持って考えることが出来るんだ！！！！**

*** 職員はしっかり仕事ができるように研修を受けてもらいたい。**

*** 仕事が出来ないのは許せる。
しかし、仕事をしないのに賃金を要求するのは許せない！**

*** 運営委員会に会員が傍聴し、発言をするのは当たり前だ！**

*** 会員の代表など執行役員を批判する権利は当たり前だ！**

*** 代表、運営委員報酬は一般会員と執行役員との間に垣根を設けることになり、「ほっとスペース八王子」内での差別の温床だ！**

*** 110番通報するという脅しは辞めて欲しい！！**